

[課題演習概要]

中学校の英語授業におけるタスク型授業と効果 —スキットづくりを中心に—

部家 梨咲子

Risako HEYA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
中等教科教育高度実践力プログラム

(2024年1月10日受理)

キーワード：タスク型授業、中学校、英語教育、助動詞should、体調不良、ペア活動、スキット作成

1 研究の目的

「タスク活動」を通して生徒自身が持つ知識を十分に活用・応用させながら新出表現を習得し、有用感を高めることを目的とした。4技能を統合させた活動を実践し、生徒の英語学習の知識・技能やその活用、及び意欲面の変容を捉えることとした。

2 研究の計画

上記の研究目的にのっとって、主に3つの観点から事前と事後でアンケート調査を行った。

- | |
|-----------------------------|
| 1. 助動詞shouldの意味と使い方を理解できた。 |
| 2. 緊急時やアドバイスをする時に英語で伝えてみたい。 |
| 3. 英語授業でのペア活動は楽しい。 |

実践後においては事前調査で質問した内容に、スキット作りの難易度に関する質問も加えた。単発的授業実践を4件法の数値で分析・考察する。

3 研究の内容

(1) タスク型授業の有用性

まず、タスクの定義について高島（2000）の定義を引用して確認する。1. 伝達内容を中心であること。2. 言語を用いて与えられた活動目標を達成すること。3. 意味のやりとりがあること。4. 2つ以上の構造の比較があること。5. 話し手と聞き手に情報（量）の差があること。6. 活動や得られる情報が興味深いものであること。

（高島、2000、p.36）

より日常生活に近づけた状況を教師が設定し、相手とのやりとりを通して、リアル感を持たせることが求められる。

(2) タスク型授業実践

2023年11月21日、22日、24日の3日間

A中学校 第2学年の生徒（129名）

活動目標：体調をたずねたり、アドバイスしたりするスキットを作って、会話しよう。

本実践の授業構成は、光村図書の *Here We Go! 2* を用いた。実践授業において授業を行った部分は、Unit6の单元末の Daily Life 6 『体調不良』である。教科書に会話例として掲載してある「頭痛」に関する会話内容を踏まえた上で、活動ワークシートには、「腹痛」、「発熱」、「捻挫」、「切り傷」の4つの場面を設定した。ワークシートのスキット部分は、①体調をたずねる表現（例：What's wrong? Are you OK?）、②症状（例：I have a stomachache/fever.）、③（動詞shouldを含む）アドバイス（例：You should take some medicine, You should go to a nurse room.）、④相手への思いやりの一言（例：Take care of yourself. Get well soon.）と内容ごとに分け、その中の各表現を適切に選択し、スキットを完成させる。実践の展開では、ペアにおいて練習に加えて、小グループにおける練習成果の共有とクラス全体における練習成果の共有の時間を設けた。緊張しながらも生徒は感情豊かに会話文に抑揚をつけて読み、ロールプレイを行っていた。この点からも、文字をただ読むだけに限らない、リアルな人物になりきるスタイルは、スキットを用いたタスク型英語学習ならではの良さと見ることができる。

4 成果と課題

研究の計画で述べたアンケート項目①～③の項目ごとの平均値、S.D.（標準偏差）、*p* 値（T検定有意差）は次の通りである。

表 1 助動詞 *should* の理解について

	1組	2組	3組	4組	5組
事前 (S.D.)	2.73 (0.92)	2.43 (1.08)	2.54 (1.02)	2.76 (0.77)	2.78 (1.17)
事後 (S.D.)	3.08 (0.74)	3.04 (0.93)	3.33 (0.67)	3.29 (0.64)	3.28 (0.84)
<i>p</i> 値 (T検定)	0.15 n.s.	0.04 <i>p</i> <0.05	0.004 <i>p</i> <0.05	0.024 <i>p</i> <0.05	0.083 n.s.

表 2 緊急時やアドバイスを英語で伝えたい。

	1組	2組	3組	4組	5組
事前 (S.D.)	2.39 (0.94)	2.43 (1.17)	1.92 (0.93)	2.00 (1.00)	2.48 (0.67)
事後 (S.D.)	3.27 (0.78)	3.17 (1.03)	2.92 (1.02)	2.95 (0.74)	3.04 (0.89)
<i>p</i> 値 (T検定)	0.001 <i>p</i> <0.05	0.04 <i>p</i> <0.05	0.005 <i>p</i> <0.05	0.01 <i>p</i> <0.05	0.024 <i>p</i> <0.05

表 3 英語の授業でのペア活動は楽しい。

	1組	2組	3組	4組	5組
事前 (S.D.)	3.12 (0.77)	3.61 (0.78)	2.75 (1.15)	2.62 (0.74)	2.83 (0.83)
事後 (S.D.)	3.12 (0.77)	3.14 (1.01)	3.17 (0.82)	3.24 (0.70)	3.28 (0.84)
<i>p</i> 値 (T検定)	0.57 n.s.	0.01 <i>p</i> <0.05	0.18 n.s.	0.02 <i>p</i> <0.05	0.12 n.s.

まず、助動詞 *should* 「～するべきだ・～する方が良い」の意味と使い方を正しく理解することができたかについて分析する。表 1 からは、5 クラスすべてにおいて、平均値が上がっていることがわかる。3 クラスで有意差が出ており、5 組においても有意差に近い数値であることから、前段階の教科書本文中で学習した助動詞 *should* の理解が今回の活動によって、より深まったと考えることができる。生徒は、実践の導入時に助動詞 *should* (助言の意味) を含めた教師からのロールプレイングのデモンストレーションを聞いたため、ターゲット文法の理解において効果的だと考えられる。

表 2 においても 5 クラスすべてにおいて有意差が出ている。生徒自身が授業中に実際に使うことで実践意欲が上昇し、文法項目と「体調不良」と

いうテーマがより生徒に身近な話題として認識されたということだ。

表 3 に示した英語の授業でのペア活動については、1 つのクラスでは有意に下がっていた。考えられる理由としては、事前の調査の段階で、他の研究項目に比べて数値が高いことが挙げられる。普段の授業においてペア活動が楽しいと感じているため、スキットのやりとりだったとはいえ、特段の数値変化は見られなかつたと考えられる。

事後のアンケートのスキットの難易度に関して、「少し難しかった」、「全く難しくなかった」と答えた生徒の割合がすべてのクラスにおいて半数以上であることから、ある程度適切な難易度だったといえる。スキット構成から会話練習までの流れが「とても」、または「まあまあ楽しかった」と答えた生徒の割合が 70～100% であったため、内容が難しいと答えた生徒の中でも前向きに活動に取り組むことができた生徒も一定数いると推察する。

ワークシート内の振り返りからは、「たずね方や心配の仕方にたくさん種類があって使い分けたいと思った・相手を心配するパターンがたくさんあることを学んだ」と表現の豊富さが印象に残ったことが分かる。より具体的な見通しを持った感想も書かれており、生徒が英語表現を日常生活と結びつけて考えていることがわかる。「体調不良は自分がいつなるかわからないので、日常でも使いたいなと思いました」、「体調不調になった人のために、この表現を言ってみようと思いました」という意見が書かれていた。体調不良に自分と相手という両方の視点から考えることができていた。

単発的なタスク活動であったため、生徒全員のすべての表現の理解へはつながらなかつた部分がある。積極的に相手とコミュニケーションを図ろうとする態度や課題を解決するための姿勢が重要視されるため、英単語理解は継続的に学習機会を設ける必要がある。さらに、スキットの難易度について、活動では応用的な表現を使用することもあるため、生徒の基盤の理解力の把握が不可欠である。最後に、分析によってペア活動に有意な数値の減少が一部見られたため、ペアの組み合わせや発音等の間違いを恐れずに英語を話すことができる環境づくりを行いたい。

主な引用・参考文献

- 高島英幸（編著）(2000).『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』大修館書店
Nunan, D. (1989). *Designing tasks for the communicative classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.